

「 学習材としての新聞記事の授業における活用について 」

指定校 2 年次 長野県木曾青峰高校 塩川 淳男 (2012 年度担当)
平林 洋一 (2011 年度担当)

1 本校のNIEの現状

指定校 2 年目を迎えるにあたり校内でのNIE実践を広げるといふ点から 1 年次担当 (社会科) と異なる教科で取り組むことを目指した。担当を決める教科・学年代表による会議が数回開かれ、次のような意見が出された。

- 教科書に (精選された) よい文章が載っているのに、そのほかになぜ新聞記事を活用する授業を時間をかけて行わなければならないのか。教科書を終わらせるだけで一杯。
＜学習材としての位置づけに関して＞
- インターネットを活用すれば新聞記事よりも広範で速報性に優れた資料などを容易に入手できるので新聞記事を授業に用いる魅力を感じない。
＜利便性に関して＞
- 東日本震災以降、記事は真実を伝えているか疑問である。
＜報道内容に関して＞
- 教科書の特性で授業での新聞記事の活用は困難である。
＜利用範囲に関して＞
- 研究は 1 年次の継続で行うべきだ。
- 新聞記事を教材化する時間的余裕がない。
＜時間的制約に関して＞
- 担当することで負担が大きくなる。
＜心理的・物理的負担に関して＞

本校で見られたNIEに対する上記のような反応・意見はおそらく他の高校でも同様であろう。2 年次新たに担当する教科・学年はなく、引き続き社会科が実践者を替えて行うことになった。日本でNIEが実践されるようになって 20 年以上経過していると聞くが、多くの教師のNIEに対する受け止め方は、推進する側の願う方向へまだ十分に進んでいないのではないかと懸念している。学校現場にはNIEに対する「プチ・アレルギー」が存在している。

こうした閉塞状況を打開し、教育現場での取り組みを広げようとする先駆的な実践例の紹介が新聞紙上や研究会などを通してこれまで報告されてきた。参加すれば生徒の成長に感心したり、担当者のそれぞれ工夫を凝らした取り組みに学んだりと多く刺激を受ける。しかし、こうした機会があるにも関わらず、本校では推進する側の願いが十分に反映されていない。

2 実践のねらい

本校での指定校 2 年次は、昨年に引き続き、新聞記事の授業での活用の在り方を中心に、次の 3 点に留意しながら取り組んだ。

(1) 生徒の授業内容への興味・関心を高める。

実践者は 1 年次・2 年次ともに新聞記事を「学習を豊かにするための道具」とし

て位置づけた。新聞記事には身近な地域に関する事柄（【2年次の例】「地域おこし」、「首長選」）や、今日の社会情勢についてのわかりやすい解説や資料（【例】「長野県内の高齢化の2012年の状況」）が掲載されており、教科書・資料集とは異なる地域性・時事性といった特性が備わっている。これらの特性を生かして、授業の内容を生徒が身近なものとしてとらえ、内容の広がり・深まりを感じながら学習していくことを目指した。

(2) 生徒が「自分たちの生きる社会・共に生きる社会」が抱えている諸課題について当事者意識をもち、主権者として解決に向けた意識をもつことができる。

今日の日本が抱えている諸課題は次代を担う高校生の問題でもある。2012年暮れの総選挙で感じられた「否定形」で社会の方向を選択し、政治家に「任せて文句を言う」スタンスではこれらの諸課題の解決は難しい。生徒に「引き受けて考える」こと、すなわち主権者としての自覚をもてるようにする指導する重要性が増している。場当たり的で二者択一の選択、雰囲気や社会の方向を決めていくことに批判的・慎重に対応し、濃淡を含んだ多角的視野から物事を判断できることの意味が大きくなっていく。

授業を通して生徒が建設的な考え方に立ち行動につなげられる第一歩となるよう、一人ひとりが社会形成において有為な存在であることを自覚できるよう取り組んだ。

(3) 教師のN I E実践経験値を高める

N I E研修会は定期的開催されているが、多忙化が進む学校現場ではさまざまな制約から参加者の増加、取り組みの拡大に容易に結びついていない。

今回の指定校という機会を生かし、一人でも多くの教師にN I Eの取り組みを知ってもらい、公開授業などを通じてN I Eへの理解を深め、授業での活用に結びつけるきっかけになることも目指した。

3 研究のまとめ

(1) 授業における新聞記事の活用について

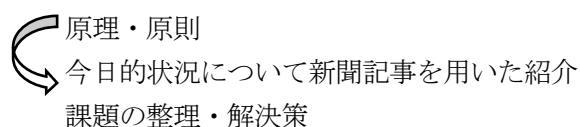
活用のねらいは前述の通り次の2点とした。

- ① 生徒の授業内容への興味・関心を高める。
- ② 生徒が「自分たちの生きる社会・共に生きる社会」が抱えている諸課題について当事者意識をもち、主権者として解決に向けた意識をもつことができる。

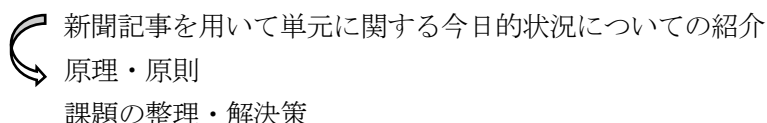
(2) 2つの授業展開

こうした授業のねらいに関して、授業の中でどのような場面で新聞記事を用いることが有効であるかを主に、本校では2通りの展開を行なった。

① 指定校1年次の展開



② 指定校2年次の展開



今年度は1年生「現代社会」の「地方自治」を扱う単元において、「首長選」「地域おこし」などの記事を単元の導入部分で紹介した。地元の首長選で焦点となっていた増大する債務を抱える公共施設の在り方など町が抱える課題が載っている記事を取り上げ、生徒の地方自治への関心を高めながら授業を展開した。地元自治体が抱える諸課題を複数取り上げた後で、地方自治の原理・原則と関連づけて学習に取り組んだ。授業の導入で自分たちが住んでいる地域の問題を伝える記事を用い、学習内容と生徒との距離感を縮めながら授業を展開していくことにポイントをおいた。感想にあるように生徒は自分が住んでいる地域の諸課題を知り、その対応を考えながら地方自治について考える機会がもてた。

③ 考察

本校2年間の公開授業における2つの展開パターンから、今年度の公開授業検討会では「拡散」と「収斂」が話題となった。学習材としての新聞記事の活用の方について、「具体的な事例を通して原則を学ぶ」、「原理・原則が今日の社会で果たすべき役割を具体的な事例と関連づけて検証する」という2つの異なる展開は授業者がそれぞれ意図して用いたわけではない。NIEには授業内容を展望する際に担当者がそれぞれの経験・感覚を生かしながら、学ぶ内容と生徒の実態を考えながら取り組むことのできる柔軟性が備わっている。担当者が記事を活用するにあたって場面・提供方法など工夫を凝らし、自由に授業を構想・創造できる魅力を備えていることを改めて認識した。

記事を活用する際の最低限押さえない点として、展開の方法は前述の2つの例のように様々考えられるが、必ず原理・原則に立ち返り、その意味を検証していくことがある。授業は生徒の基礎力を培う基盤であり、ことに高等学校は有為な主権者となるうえで学びの最終段階となる場合も多い。この国のかたちを、生徒が自分が社会を形成する存在、主権者であるという自覚をもち、論理的・客観的な考え方に基づいて社会づくりに貢献できるようなきっかけとしてNIEは有効である。今日の社会情勢を見据えながら、具体的な事例と原則との関連性を確かめることが、社会と生徒との距離を縮めた授業内容への統合、「収斂」につながる。

4 研究の概要

(1) 指定校2年次の取り組み

① 実施学年・教科 1年・現代社会

単元名 「日本国憲法と国民生活 地方自治と住民福祉」

② 概要

単元の目標

「木曾地域の現状について理解する」

「3つの空洞化および誇りの空洞化について理解することができる」

「地域再生について、住民の視点・若者の視点から考えるきっかけを持つことができる」

③ 授業展開（公開授業における）

■木曾地域の現状について 資料プリント（新聞記事・各種文献）を用いての説明



■地方自治が直面している課題についての学習

◆限界集落の説明

◆「農山村の空洞化」・・・時代背景・空洞化の実情、

人・土地（農林地の荒廃）、むら（集落機能の脆弱化）、
誇りの空洞化（心の過疎）

◆首長選挙の争点となっている地域産業問題



■本校生徒とのかかわりの紹介



■住民の視点・若者の視点で地域社会とかかわっていくことの重要性の指摘

④ 生徒の感想

【地域への関心】に関して

「・・・自分たちの住む地域の情報は意外と知らないもので、大桑村の一面を知ることができ、さらにそれを通して、自分の住む木祖村のことを考えることができ有意義な時間だった」
「少しではあるが、自分たちの住んでいる地域について見直すことができた。いい機会だった」

【新聞を用いた授業】に関して

「新聞はいつも読まないのでも読み慣れず、少し苦戦したが、内容は理解できた」

「すぐ近くの市町村でも、まだまだ知らないことがあり、こういうふうには新聞などで知ることがよかった。今後も積極的に新聞を読み、社会のことについて学びたい」

「新聞を使う授業も面白いと思った。そんなに新聞を読む機会もないので良いと思った」

新聞記事を用いることで地域の抱える問題に対する生徒の関心・問題意識を高める上で有効であったことがわかる。新聞の特性を授業に生かした有効性が確かめられた。

一方こんな感想もみられた。

「新聞をあまり見ないからちょうどいい機会だと思った。しかし私は現代社会についてあまり興味がなく新聞を使うというのは少し辛い面があった。」

「辛い面」の具体的内容は匿名感想アンケートのためわからない。記事を読むことに語彙力などの点から記事の理解に難しさを感じたり、記事で取り上げられている内容に関

心が持てなかつたりしたのかもしれない。こうした生徒に記事に触れる回数を増やし、生徒の語彙力・読解力を高め、世の中の出来事について知る機会を提供し続けることで、新聞を通して考える力が高まってくるだろう。活字を追う段階から、記事の内容が理解できる段階へ、そして自分の考えを多角的に見つめ、建設的な意見を持てる段階へと導きたい。社会が抱える諸問題に当事者の一員として向き合い、自分が理想とする社会のかたちに向け、どのかかわり、貢献できるかを意識できるよう進路指導とも関連づける可能性を探りたい。

「新聞って楽しい」と感じる生徒が一人でも増えることは担当者の大きな喜びである

(2) 授業以外での実践

本校では以下の取り組みを試みている。

① 語彙力アップ、考える材料を得るために ～ SHRでの書き写し ～

「語彙力のアップ」「よい文章を読む機会を増やし、考える材料を得る」「面接の際に自分の考えを自分の言葉で伝えることができるようになる」を目的に、SHRでの「すき間時間」を利用して「天声人語」の書き写しを行っている。

「語彙・読解力」はこれからの生活を円滑に進めていくための土台である。語彙力はコミュニケーションを豊かにする。「カワイイ」「ウザイ」という感覚的な語彙の世界にとどまらず、自分の気持ちを的確に表現でき、またコントロールすることにもつながる。読解力が高まれば、相手の言いたいことがわかる、相手の言葉に含まれている気持ちや意味を推し量れることができる、すなわちコミュニケーションのズレが少なく、お互いの理解が円滑に進むようになることが期待できる。書き写しの効果として含まれる。

書き写しでは、取り組む曜日と時間を決め、計画的に続けられる体制を整えていくことが効果を高めるためには不可欠である。指定校2年間ではゲリラ的な取り組みに終始し、体系だった取り組みには至らなかった点は残念であった。今後工夫を要する。

② 新聞に親しむために ～ ゲーム感覚的要素を入れたLHRでの取り組み ～

■記憶力を高める

1分間でコラムの文章を可能な限り暗記し、1分後、暗記した文章を原稿用紙に書きだし、正確に覚えた字数を競い合う取り組みを行った。頭に入った情報を操作・加工したりして行動につなげる能力（作動記憶）が鍛えられ、大脳・前頭前野の発達の訓練になる。デジタル化・IT化が進む今日、「書き写し」というアナログ的な方法には作動記憶力の効果的な訓練の要素が含まれている。お手本の文章をみて、固まりとして覚えていく。一度に覚えられる固まりを多くすることを心がけ、「自分ができるギリギリの難しさで続ける」ことでより効果が得られる（注）とされる。

（注）川島隆太 東北大学教授 2012・6・12 朝日新聞

継続的に行うには至らなかったが、生徒が興味を持って楽しみながら取り組めたという点で、今後の取り組みの可能性を確かめることができた。

■漢字力を強くする

全文ひらがなのコラムを漢字を用いながら書き直す。文章の中で意味を考えながら漢字を正しく用いる機会を設け、実用性を意識しながら取り組むことができた。

5 残された課題

(1) 生徒の言語を豊かにする学習材としての活用方法の工夫

学習指導要領に「生徒の言語活動の充実」、「基礎的・基本的な知識・技能の習得や活用、探究」、「学習活動、コミュニケーションの基盤」という言語に関する能力の向上がかかげられており、NIEはその有効な手立てとなる。

小論文などまとまった文章を用いる場面で自分の考えを論理的に相手に伝える点で苦労している生徒も多い。記事から刺激を受け、自分の言葉で考え、周囲が納得するに説明できる力の育成を目指し新聞記事の積極的な活用を考えたい。

「いいか悪いか」と単純化して二者択一を求める今日的な風潮の中で、流されずじっくりと物事を多角的に考えることができる土台づくりにおいて語彙・読解力の養成は大きな課題であることを強く意識したい。

(2) 生徒一人ひとりの当事者意識を育てる

今の生徒は「カワイイ」「ウザイ」という短く感覚的な言葉で多くを伝える・伝わることができると考える傾向がある。また自分の気持ちをメールの絵文字で表現し意思疎通を図ろうとする比重も高い。インターネットの出現にともない、問題は多層であるにも関わらず、自分の好み・価値観に合う情報だけを取捨選択しやすい傾向に危機感を覚える。

また直接向き合うことで相手の表情を見ながらコミュニケーションを図るのでなく、即応性を強く意識した一方的で不十分な発信で意思疎通を図ろうとするので、相手を尊重して「聴く力」が低下しているという指摘もある。

現在進行形の出来事を知らなければ、問題の所在はおろか、判断する時に、根拠が十分でないままにイメージや響きの良い言葉や、単純化した選択肢だけから判断していく状況が生まれる。自分・家族・友達・地域の幸せの実現と社会情勢には強い関連があり、この国のかたちをつくる上で重要な主権者であることを自覚しながら生きていけるようにすることが教育に課せられている使命である。

様々な情報を網羅している新聞記事を読むことでバランスのとれた判断ができることを目指した。

(3) 教師の取り組みの輪を広げる

残念ながら本校における2年間のNIE指定校実践は担当者個人の取り組みにとどまり、実践の蓄積には至らなかった。校内でのNIEの効果の検証、例えば千葉県小学6年生が15分間の書き写しで当初平均170字であったことが1か月後には250字になり集中力の質が高まったなどの報告(朝日新聞)の自校版が求められる。生徒の「テストの点数が上がった」「書き写しに要する時間が回数を重ねるごとに短縮され、生徒の語彙力・読解力の向上が見られた」など、自校の取り組みの成果を数値化して伝えることができれば、校内に取り組みが広がる余地がある。

冒頭の「プチ・アレルギー」を払拭し、実践者が増え、お互いの方法・工夫の交流が、新しい発見や刺激をもたらし、NIEの拡充につながるよう取り組みたい。

これからも取材する記者が批判精神をもって事実について調べ、検証し、エネルギーを注いで送り出されてくる記事を教室で楽しみに待っている。(文責 平林)